

栄養教諭養成にかかる 栄養教育実習の現状と課題

Current situations and issues of nutrition education
practice that hangs to diet and nutrition teacher training

並 河 信太郎

栄養教諭制度は2004（平成16年）5月に成立した学校教育法等の一部を改正する法律で新設された。食生活を取り巻く社会環境の変化などに伴い、偏った栄養摂取などの食生活の乱れや、肥満傾向の増大、過度の瘦（そう）身などが見られるところであり、また、増大しつつある生活習慣病と食生活の関係も指摘されている。このように、望ましい食習慣の形成は、今や国民的課題となっているともいえる。朝食をとらないなど子どもの食生活の乱れが指摘されており、子どもが将来にわたって健康に生活していけるよう、栄養や食事のとり方などについて正しい知識に基づいて自ら判断し、食をコントロールしていく「食の自己管理能力」や「望ましい食習慣」を子どもたちに身につけさせることが必要となっているため、中核的な役割を担う教育職として栄養教諭制度が創設された。このように、制度創設の趣旨は、学校教育における食に関する指導（学校における食育）の指導体制を充実させることにより、その推進をはかるものであると考えられる。

栄養教諭普通免許状は教育職員免許法に規定され、専修、一種、二種の三種類があり、大学で所要単位を修得することにより養成することが基本となっている。栄養教諭免許状で修得する単位として、教職に係わる科目と栄養に係わる教育に関する科目がある。教職に係わる科目として、教職の意義等に関する科目、教育の基礎理論に関する科目、教育課程に関する

科目、生徒指導及び教育相談に関する科目、栄養教育実習、教職実践演習が規定されている。栄養教育実習は実際の学校現場における実習を通して、栄養教諭に係る基礎的な資質と適性を身につけるとともに、教科・特別活動等における食に関する指導に係る授業研究、生徒指導、学校行事などに取り組み、食に関する指導における実践的な指導力を養うことを目的としている。

栄養教育実習は事前事後指導を含めて2単位であり、学校における実習期間は5日間である。栄養教育実習のカリキュラムは国が示した内容に基づいて、大学と実習校との調整を行い、決定されている。

そこで、栄養教育実習の現状と課題について、明らかにすることをねらいとして研究を行った。

1 調査方法

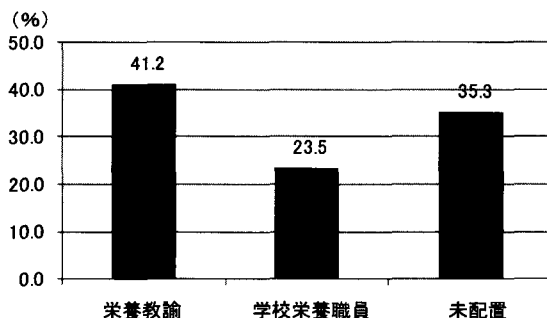
(1) 対象とした実習校の属性及び実習期間

ア 校種・校数 小学校 17校

イ 実習期間 平成22年5月・6月の5日間

ウ 栄養教諭・学校栄養職員の配置

表1 栄養教諭・学校栄養職員の配置 (n=17)



(2) 調査は実習生が記録した「栄養教育実習の記録」により分析を行った。

2 栄養教育実習の内容・カリキュラム

(1) 文部科学省通知による内容

栄養教育実習の内容は文部科学省通知で示されている。内容は大別すると事前事後指導と学校での実習に分けられている。そのうち、学校における実習は指導教諭等からの説明、児童及び生徒への個別的な相談指導の実習、児童及び生徒への教科・特別活動等における指導の実習、食に関する指導の連携・調整の実習の4区分で示されている。

資料1 文部科学省「栄養教諭制度の創設に係る学校教育法等の一部を改正する法律等の施行について」通知による栄養教育実習の具体的な内容

(1) 事前及び事後の指導（1単位）

- 事前指導：栄養教育実習の意義や目的、心構えなどのほか、実習の評価の方法、実習後の提出物（実習ノートや指導案など）、実習中の大学との連絡方法などについて指導等
- 事後指導：実習の反省、問題点の整理、今後の課題の明確化等

(2) 学校での実習（1単位）

- 指導教諭等からの説明
 - ・学校経営
 - ・校務分掌の理解
 - ・服務等
- 児童及び生徒への個別的な相談、指導の実習
 - ・指導、相談の場の参観、補助等
- 児童及び生徒への教科・特別活動等における指導の実習
 - ・学級活動及び給食の時間における指導の参観、補助
 - ・教科等における教科担任等と連携した指導の参観、補助
 - ・給食放送指導、配膳指導、後片付け指導の参観、補助
 - ・児童生徒集会、委員会活動、クラブ活動における指導の参観、補助
 - ・指導計画面、指導案の立案作成、教材研究等

○食に関する指導の連携・調整の実習

- ・校内における連携・調整（学級担任、研究授業の企画立案、校内研修等）の参観、補助
- ・家庭・地域との連携・調整の参観、補助等

(2) 本学の栄養教育実習の内容及びカリキュラム

本学では文部科学省による具体的な内容に基づいて、栄養教育実習の内容及びカリキュラムを（資料2）策定している。

事前事後指導では、栄養教育実習の意義・目的、栄養教育実習の心得、学校組織の理解とコミュニケーション、実習目標・研究課題、栄養教育実習記録の書き方、指導案の作成、指導案に基づく模擬授業及び討議会、栄養教育実習報告会である。実習期間が短期間であるため、学習指導案及び教材は実習校の打合せと並行して作成する。

学校における実習は学年配属を前提として、授業参観を中心に編成している。内容は、指導講話、個別的な相談指導、教科・特別活動等における指導、食に関する指導の連携・調整等としている。実習期間に実習授業を1単位時間実施することを必須としている。カリキュラムは実習校に実習の前年度に参考提資料として提供している。

資料2 実習校に示している栄養教育実習カリキュラム（例）

	第1日目	第2日目	第3日目	第4日目	第5日目
登校	登校指導補助				
朝の会等	教職員・児童へのあいさつ	授業参観等準備			教職員・児童へのあいさつ
1時間目	授業参観	授業参観	授業参観	授業参観	授業参観
2時間目					
3時間目					
4時間目					
給食時間	給食指導参観補助・児童給食委員会補助				
5時間目	授業参観	授業参観	授業参観（クラブ活動等）	授業参観（委員会活動等）	実習授業
6時間目					実習授業のまとめ

放課後	指導講話（学校教育目標・教育課程、人権教育等）	指導講話（食に関する指導等）	指導講話（健康教育・生活指導等）	実習授業の検討	実習授業及び実習反省会
	教材・学習指導案・指導資料作成、実習のまとめなど				実習のまとめ

（備考）

○配属学級
学級に配属し、主にその学級において、給食指導参観を実施する。

○指導講話
学校教育目標、教育課程、校務分掌、生活指導、食に関する指導の全体計画や組織などが想定される。

○授業参観
授業参観は配属学級を中心とする場合、他の学級・学年と組み合わせる場合などが想定される。家庭、理科、社会、生活、体育（保健）、総合的な学習の時間、特別活動（委員会活動、クラブ活動）など食に関する指導に関連する授業で適宜実施することが効果的である。

○給食指導参観・児童給食委員会補助
配属学級における給食の準備から後片付け、給食室における運搬・返却、給食室における児童給食委員会活動を参観する。

○実習授業
特別活動等において、1 単位時間（45 分）で実施する。

○個別的な相談指導
肥満傾向のある児童や食物アレルギー等個別的な相談を必要とする児童への指導について参観・補助する。

○学校給食の運営管理（献立作成、給食業務の実際等）は、栄養教育実習の内容に含まれていない。

3 結 果

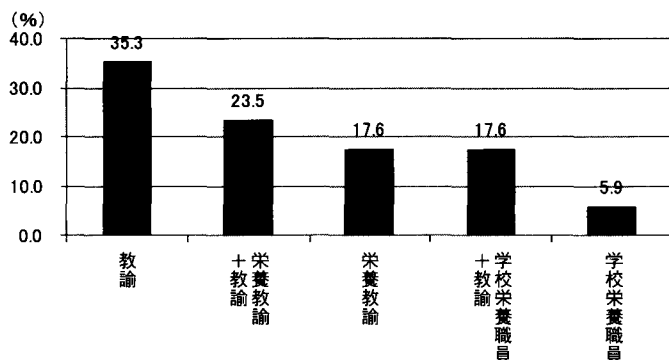
(1) 指導担当教員

教諭の教育実習では、配属学級の教諭が担当する。栄養教育実習は配属学級がない場合や栄養教諭・学校栄養職員が配置されていない場合があり、指導担当教員は様々なケースが想定される。指導担当教員の日常的な

指導が栄養教育実習の実施に大きく影響すると考えられる。教員としては、学級担任、給食主任、教務主任、養護教諭が考えられる。

指導担当教員の職種別の結果は次のとおりである。

表 2 指導担当教員の職種 (n=17)



栄養教諭・学校栄養職員が配置されている場合も教諭と複数の体制で指導担当にあたる場合が多い。栄養教諭が指導担当教員であるのは 41.1% である。栄養教諭は全校に配置されていないため、低率になっている。栄養教諭の定数は、学校栄養職員と合算した数で、公立義務教育諸学校の学級編制及び教職員定数の標準に関する法律により定められている。

○栄養教諭・学校栄養職員の定数

区 分	児童・生徒数	栄養教諭・ 学校栄養職員数
学校給食を実施する小学校若しくは中学校又は 中等教育学校の前期課程の児童又は生徒の数	550 人以上	1
	549 人以下	4 校につき 1
共同調理場に係る小学校及び中学校並びに中等 教育学校の前期課程の児童及び生徒の数	1500 人以下	1
	1501 人から 6000 人まで	2
	6001 人以上	3
学校給食を実施している特別支援学校	—	1

平成 20 年度の学校給食を実施している小・中・特別支援学校は 30,721 校で、栄養教諭・学校栄養職員数は 12,247 名である。学校給食を実施している学校数に対する配置率は 39.8% である。栄養教諭は平成 22 年 4 月 1 日現在、全国で 3379 名が配置されており、配置率は約 11% である。

栄養教諭の配置の進捗率は今後も更に推進されるものと考えられるが、国における定数法の改善がない限り現行の栄養教諭・学校栄養職員数が基本となるため、約 60% の学校では栄養教諭が配置されていない状況が継続すると考えられる。したがって、教諭が指導担当教員である場合を含めて栄養教育実習を進めることが不可欠である。そのため、実習校との事前打合せを適切に行うことが必要である。

(2) 学級への配属

児童の実態を把握するめには、授業参観だけでなく、登校から下校までの学級における指導を参観することが必要である。そのためには、学級への実習生の配属が効果的である。教諭の教育実習では、配属学級において実習を行う。実習生の学級への配属は 76.5% である。配置校別では、栄養教諭配置校が高率であった。学級へ配属されている場合でも他の学年・学級の授業参観は行われていた。栄養教諭は全学年を対象とした食に関する指導を担当するため、幅広い学年での授業参観が望ましいと考える。しかし、実習期間が短期間であるため、6 学年のすべての教科等を授業参観することは困難である。配属学級を中心にして、可能な他学年の授業参観を取り入れることが適切であると考ええる。

表 3 学級への配属 (n=17)

配属学級	全体	配置校		未配置校
		栄養教諭	学校栄養職員	
あり	76.5%	85.7%	75.0%	66.7%
なし	23.5%	14.3%	25.0%	33.3%

(3) 授業における実習

教諭・栄養教諭・学校栄養職員による授業を参観することは、栄養教育実習の最も重要な内容である。栄養教諭としての指導力を身につけるために、実際の授業を参観し、自らの指導に活用していくことが必要である。

授業参観においては、1単位時間の授業と数次にわたる指導計画による授業の両方を参観することが必要である。栄養教諭・学校栄養職員が学級担任に協力して特別活動の学級活動等で行う授業は1単位時間で実施される場合が多い。一方、学級における授業を担当している学級担任等の教諭による授業は教科等で複数単位時間の授業で行われる場合が多い。

ここでは、全体の授業における実習をまとめた。授業における実習は児童の学習状況を観察・参加し、発問や指示、板書、学習活動の進め方を実習することができる。

授業参観の時数は配属学級や他学年・学級の授業参観の有無により、大きく変動する。5日間の実習期間で実習授業の1時間を除いて最大で29時間の時数の授業参観が可能である。結果は、21時間以上は58.8%、20時間以下は41.1%である。15時間以下は学校行事による授業時間の短縮、指導講話、PTA 学校給食試食会、実習授業の準備等により授業参観の時数が少なくなったことが原因と考えられる。

配置校別にみると、栄養教諭配置校はばらつきが大きく、未配置校の方はばらつきは小さい。栄養教諭配置校では、食に関する指導と学校給食の運営管理の両方の内容を取り入れている場合は、授業における実習が少なくなる傾向である。

表4 授業における実習の時間数 (n=17)

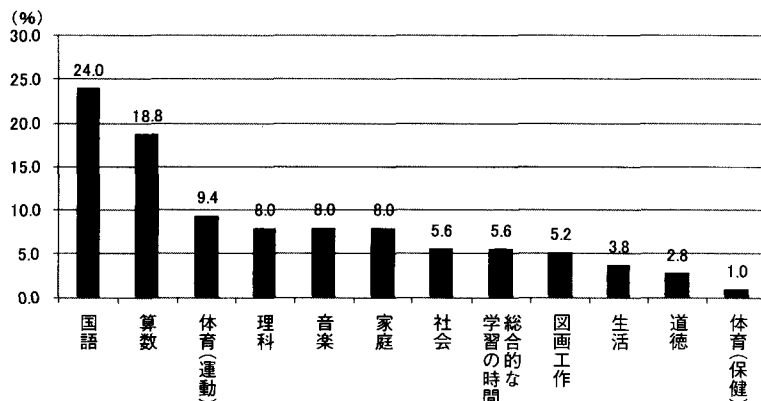
時間数	全体	配置校		未配置校
		栄養教諭	学校栄養職員	
15 時間以下	17.6%	28.6%	25.0%	0.0%
16～20 時間	23.5%	28.6%	0.0%	33.3%
21～25 時間	52.9%	28.6%	75.0%	66.7%
26 時間以上	5.9%	14.3%	0.0%	0.0%

(4) 教科・道徳・総合的な学習の時間における実習

授業における実習のうち特別活動を除いた教科等の割合をみると、81.6%で、国語から総合的な学習の時間まですべての教科等で実施されている。教科等のうち国語、算数、体育（運動）の時間数が多い。授業の内容は食に関する指導に関連する内容に限定されずに、様々な内容が取り扱われている。

学年は配属学級を中心に1学年から6学年まですべての学年にわたって行われている。体育（保健）、家庭、生活、総合的な学習の時間など食に関する指導に関連する内容については、割合は少ない。

表5 教科・道徳・総合的な学習の時間別の実習時間の比率（n=288）

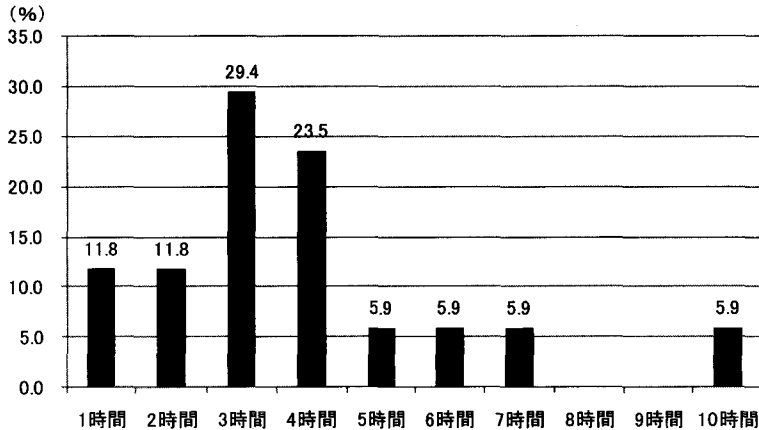


(5) 特別活動における実習

学校給食に関する指導は学習指導要領で特別活動の学級活動に位置づけられている。内容は食育の観点で踏まえた学校給食と望ましい食習慣の形成として示されている。栄養教諭・学校栄養職員が教諭に協力して各学級3時間程度は実施が可能であるとされている。指導内容は1単位時間の場合が多い傾向にあると考えられる。

特別活動の授業参観時数の結果は次のとおりである。1～2時間までは学級担任による授業で、食に関する指導の内容以外での授業である。3時

表 6 特別活動における実習 (n=17)



間以上は食に関する指導の内容で実習校または他校の栄養教諭・学校栄養職員による授業を複数時間参観している。

(6) 給食時間における実習

給食時間の指導は、実践活動を通して給食の準備から後片付け及び食に関する指導が毎日、繰り返して行われる。教科等の学習内容と学校給食の内容を計画的に関連付け、指導することが必要である。さらに、一人一人の児童生徒の食事の量や食べる早さ、食物アレルギーや肥満傾向等の健康状態を把握し、個に応じた指導が行われている。

給食時間における指導内容は学習指導要領解説書特別活動編に例示されている。小学校は楽しく食事をする事、健康によい食事のとり方、給食時の清潔、食事環境の整備、自然の恩恵などへの感謝、食文化、食料事情、中学校は楽しく食事をする事、栄養の偏りのない食事のとり方、食中毒の予防にかかわる衛生管理の在り方、共同作業を通して奉仕や協力・協調の精神を養うこと、自然への恩恵などへの感謝、食文化、食料事情などである。給食時間における参観は日曜参観など学校給食を実施していない日を除いて、すべての学校で毎日実施されている。

(7) 栄養教諭・学校栄養職員の授業の実習

栄養教諭・学校栄養職員が特別活動の学級活動、食に関する指導の関連教科等で担当する授業を参観することは栄養教諭としての指導力を身に付ける上で効果的である。栄養教諭・学校栄養職員が配置されていない実習校においても他校の栄養教諭・学校栄養職員が出張して授業を実施している場合に授業を参観することが可能である。

授業の実習は58.8%で実施されており、時間数は2時間以上が23.6%である。未配置校では他校の栄養教諭・学校栄養職員が指導する場合に複数の学級で実施している場合がみられた。実施される時間は、特別活動の学級活動における1単位時間の場合が多い。

表7 栄養教諭・学校栄養職員が行う授業の実習 (n=17)

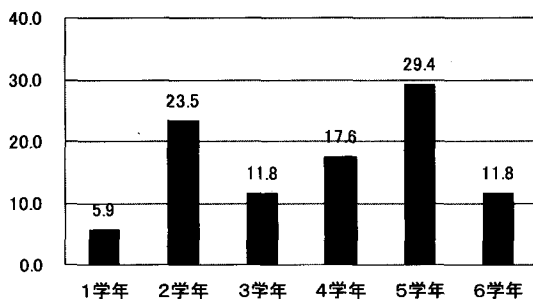
時間数	全体	配置校		未配置校
		栄養教諭	学校栄養職員	
なし	41.2%	28.6%	50.0%	50.0%
1時間	35.3%	57.1%	25.0%	16.7%
2時間	5.9%	0.0%	0.0%	16.7%
3時間	5.9%	14.3%	0.0%	0.0%
4時間	5.9%	0.0%	0.0%	16.7%
5時間	5.9%	0.0%	25.0%	0.0%

(8) 授業実習（研究授業）

本学における栄養教育実習では、1単位時間の授業実習を実施することを基本としている。実習期間が短期間であることを考慮し、大学における事前指導で学習指導案、教材、模擬授業を実施している。

授業実習の時間は特別活動の学級活動が88.2%、家庭が17.8%である。題材は「3色食品群をしろう」「カルシウムをとろう」「清涼飲料水について考えよう」「おやついてしろう」「野さいを食べよう」など食に関する指導の目標として示されている6項目のうち心身の健康に関するものに限定されている。

表 8 実習授業の学年 (n=17)



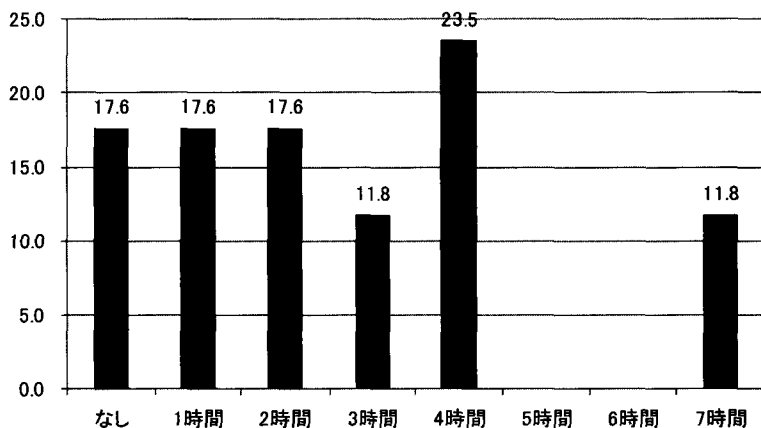
学年別では全学年で実施されており、2年と5年が高率であるが、配属学級の影響が大きいと考えられる。

実施した時間数は1時間が76.5%、2時間が23.5%である。

(9) 指導講話

実習校の教職員による指導講話は、実習校の教育方針、児童の実態等を理解するために、必要に応じて行われる。内容は学校教育目標から食に関する指導の全体計画まで幅広い。指導講話の時間数は4時間までが70.5%であり、特に実施していないが17.6%である。

表 9 指導講話の時数 (n=17)



実習期間が5日間の短期間であり、授業参加、授業実習に時間を確保するためには、指導講話の時間を適切に設定することが必要である。

栄養教育実習の事前打ち合わせ等において、指導講話で取り扱う内容を先行して実施することも考えられる。

4 考 察

(1) カリキュラムの充実

実施校では、栄養教育実習と管理栄養士国家試験受験資格および栄養士免許にかかる臨地実習について、どのように区別するか明確になっていない面がある可能性がみられる。栄養教諭は学校給食の運営管理を行うので、学校給食にかかわる栄養管理・衛生管理を栄養教育実習の内容として取り入れている場合がある。栄養教育実習は、食に関する指導の教育指導にかかわる内容であり、授業実習を中心に行うものである。実施校への依頼段階や実習生と実施校の事前打ち合わせ等において、実習内容への理解をはかることが一層必要である。栄養教育実習は1単位で、実習期間は5日間であり、授業実習を中心にカリキュラムを編成し、実施していくことが必要である。なお、本学では学校給食の運営管理を中心とする臨地実習は、3回生で実施している。栄養教諭免許の取得を希望する学生は、実習施設を小学校としている。栄養教育実習は4回生で実施するため、3回生における臨地実習の成果を4回生の栄養教育実習で活用できるようカリキュラムを編成している。

(2) 栄養教諭・学校栄養職員の未配置校における課題

栄養教諭は全校配置ではないため、栄養教諭以外の職種の教員が指導担当教員を担うことが多いと考えられる。

「学級への配属」、「授業における実習の時間数」は配置校と未配置校で課題とすべき顕著な差はみられなかった。

未配置校の課題として想定される点は次の二つがあげられる。まず、実習授業等にあたって、栄養にかかわる専門的事項にかかわる指導助言をど

のように行うかである。大学における事前指導の充実をはかるとともに、配置校の栄養教諭・学校栄養職員の協力が得られるよう体制が整備されることが望まれる。二つ目に「栄養教諭・学校栄養職員による授業」の参観である。これは、配置校の栄養教諭が出張して授業を行うことで実施することが可能である。

(3) 各学年における実習の充実

栄養教育実習は1週間の実習期間である。授業における実習で、授業参観を行う。配属した学級において継続した実習を行うと、小学校の低・中学年では食に関する指導に関連する教科等が少ないため、関連する教科等の授業参観が実習できないことや教科等の構成が偏ることがも想定される。

関連する教科等としては、家庭、体育（保健）、理科、社会、生活、道徳、総合的な学習の時間等であり、その授業時間数は3年以上に多い。

配属学級があると共に、すべての学年で食に関する指導に関連する教科等を取り入れることが必要であると考ええる。

(4) 栄養教諭・学校栄養職員が行う授業の参観の実施

栄養教諭・学校栄養職員は特別活動の学級活動における指導を行う頻度が高い傾向である。栄養教育実習においては、教諭が行う授業と合わせて栄養教諭・学校栄養職員の行う授業の参観が必要である。

(5) 学校における食に関する指導は、学習指導要領の教育課程編成一般方針の体育・健康に関する指導で、「発達段階を考慮して体育科、保健体育科の時間はもとより、家庭科、技術・家庭科、特別活動などにおいてもそれぞれの特質に応じて適切に行うなど教育活動全体として取り組む」ことが示されている。食に関する指導は、学校給食を中核として様々な教科等を関連させつつ推進されている。栄養教育実習では、この趣旨を踏まえて、給食時間、教科等を幅広く実習し、栄養教諭として必要な資質と指導力を身に付けられるよう充実をはかっていくことが必要である。

参考文献

文部科学省「食に関する指導の手引」文部科学省，2010

笠原賀子「栄養教諭を目指す栄養教育実習ノート」医歯薬出版，2008

金田雅代「三訂栄養教諭論」建帛社，2010